

SATO YAMA UMI プロジェクト

ユース海外インターンシッププログラム 活動報告書

早稲田大学政治経済学部政治三年 山本咲希

現地受け入れ団体：コンサベーションインターナショナルサモア

期間：2018年8月8日～2018年10月8日

1. 目的

私がこのプログラムに参加した第一の目的は、「持続可能な開発」の意味について考え直すことでした。私は現在大学で開発経済を専攻しているため、普段はそれについて主に経済という側面から日々学習と考察を重ねています。しかし、私は「持続可能な開発」には多角的な視点が必要であり、特に経済、文化、環境の三本柱が重要であると考えています。将来開発という立場から「持続可能な開発」に関わっていくにあたって、今回のインターンシップでは環境について、特に現地でフィールドワークをすることでよりバランスの取れた視点を得たいと感じていました。

また第二の目的は、現地の NGO で働く経験をすることで、現場に最も近い視点を得るとともに NGO が社会の中で果たしている役割について学ぶことでした。何が強みで何を課題にしているのかなどを、政府や他の NGO 等外部との関わりが多い CI から特に学ぶことができるのではないかと考えていました。

2. 内容

派遣先の CI サモアは3～4人ほどの小さいローカルな組織です。CI サモアは現在進行形で“Guardians”という環境教育キャンペーンを進めています。サモア語のキャンペーン名“Tausi lou faasinomaga”は、直訳すると「アイデンティティを守ろう」という意味で、サモアの環境やさらには文化について学ぶことで暮らしを守っていこうというメッセージが込められています。内容としてはサンゴ礁、漁業、森林、ごみ問題という4つの環境に関するモジュールにサモアの伝統的なカヌーでの航海を加えた5つのモジュールについて扱います。「海に浮かぶ教室」をテーマにしていますが、文字通りサモアの伝統的なカヌー“Vaa”の上に子供たちを乗せたり、他にもゲームや歌を取り入れたり彼らが積極的に楽しんで学べることを重要視しています。サモアの全ての小学校をカバーすることを目標としており、環境保護の重要度が高い地域から順番にキャンペーンを行っています。また、キャンペーンを行う約一か月前には社会認識調査を行い、村の暮らしの様子や抱えている環境問題などについて分析を行います。今回私が滞在中に担当したのは社会認識調査の補佐、“Guardians”キャンペーン運営の補助と、エコツーリズムについてのリサーチなどのその他の業務です。

3. 所感

二か月間の滞在を通じ、「持続可能な開発」について視野を広げるといふ第一の目的は概ね達成することができました。現地で生活をする中で、サモアの発展に環境がいかに重要であるかを感覚としてはっきり得ることができたように思います。サモアはココナッツやバナナ、タロイモなどの作物が豊富で厳しい季節がないという性質から、伝統的に島にあるものを活かせば非常に豊かな暮らしをすることができます。しかし、価値観やライフスタイルの欧米化に伴い輸入品に頼らざるを得なくなり、生活コストが上昇したことで暮らしが苦しくなるというある種のジレンマを抱えているのを目の当たりにしました。このことから、先進国―途上国という一次元的な発展モデルにあてはめることは全ての国にとっての正解ではなく、環境や文化などの独自性を最大限生かし近代的な価値観とのバランスをとることが一国の発展にとっていかに重要であるかを実感しました。この感覚を得るまでに、社会認識調査でコミュニティの方の貴重な意見を伺うことができたことや CI をはじめとした“Guardians”チームのローカルメンバーと密に関わることができたことは非常に役に立ったと感じています。

また、第二の目的であった NGO の社会における役割を理解するという点においても二つの気づきがありました。一つは NGO が持つ人や団体を繋ぐ力です。“Guardians”キャンペーンにおいて CI サモアは、農林水産省、文部科学スポーツ省、環境省等の政府から派遣されたスペシャリスト、Vaa を使った航海の実践者である Samoa Voyaging Society と多くのボランティアからチームを作り、マネジメントするという立場に徹していました。政府にも私企業にも属さない中立的な立場であることが様々なセクターを繋ぐという点で役に立っているのではないかと思いました。もう一つは社会全体にとって必要なことだが政府には拾いきれないニーズを満たすという役割です。「“Guardians” キャンペーンは、学校のカリキュラムには含まれていないがサモアの将来に必要なメッセージを効率的に伝えている」というフィードバックを先生方から頂いた通り、特に教育においてはカリキュラム外の実践分野に対し専門家を集めてアプローチするという働きかけは NGO ならではの働きかけを感じました。

このように全体を通して、自分の特長であった適応力を活かしながらサモアでの二か月間で多くの学びを得ることができました。また、活動以外でも様々な現地での出会いがあり、全く異なる文化背景の人々と関係を構築できたことも自分の人間性を豊かにしてくれたように感じます。大学卒業後は国際協力期間や民間企業から途上国の開発に携わることを希望していますが、環境の世界に身を置き、より自分事として知識や経験を得ることができたのは大きな財産だと思っています。今回のインターンシップでの経験を活かし、大学での研究やその後のキャリアを通じて「持続可能な開発」を実現できる人材として社会で活躍していきたいです。最後に、このような大変貴重な機会を作ってくくださった SATOYAMAUMI プロジェクトの皆様と KNCF の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。